

よろうし



シマフクロウ



養老の滝

温泉
読本



露天秘湯。
みんな

開湯100周年。



緑の中の二軒宿。

満天の星。

ヤマベ
山女を食す。

森の中の

シマフクロウが
来る川。

養老牛

道東ど真ん中。

よろうし温泉

養老牛温泉

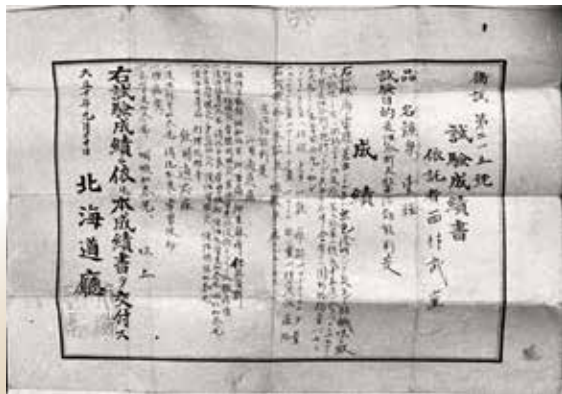
ちんぷんしゅんせんとせん



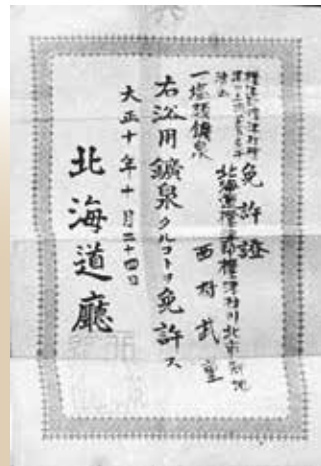
平成10年頃撮影

養老牛の語源はアイヌ語です。「エ・ウォル・シ」→「山が岩崖になって水の中にささり込むところ」(更科源蔵)が解釈としては有名でしたが、現在は「イ・オロ・ウシ」→「それを・水に漬ける・ところ」(山田秀三)が有力のようです。

「ヨローウシ」というカタカナ地名に、はじめ「養老趾」とあて字をし、その後「養老牛」とあらため、これが地図に採用され現在の地名になっています。



西村が取得した「温泉試験成績書」大正10年中標津町・蔵の写真から復元



養老牛の語源の一つである川の中の岩 昭和9年 ~現在はありせん

地域の伝説 ～モアン川のヤマメ～

中標津町養老牛温泉の近くをモアン川という小さな川が流れています。

むかし、虹別のアイヌたちは春になると養老牛温泉に行き、男たちは熊狩りを、女たちは温泉でオヒョウニシの皮をなめし、そしてモアン川でヤマベ釣りをしていました。

この中には虹別のコタン（村）で一番美しい娘と、一番勇敢な若者がいました。

娘は若者が大好きでした。若者も娘が好きだったので、熊や野兔などの獲物がとれるといつも分け前を娘の家の前に置いていたのです。

ところが、ある日若者は突然姿を消してしまいました。

ひと月たってもふた月たっても若者のゆくえはわかりません。

娘は若者が自分を嫌いになって姿を消したのだと思いとても悲しみました。

でも、それは娘の思いすごしでした。実は若者は熊と格闘の最中に摩周岳の火口に落ち、大ケガをして動くことができなくなっていたのです。

しばらくたって、このことがようやく娘の耳に届きました。娘はとても驚き、家族にもつげず大急ぎで摩周岳へ向かいました。このとき娘は、若者のケガが早く良くなるようにと、モアン川の子をたくさん釣って持っていきました。

しかし、残念なことに、娘が摩周に着く前に若者は神様に召されていたのです。

娘は大そう悲しみ、いつまでも泣いていました。

娘のなげき悲しむ姿をみた摩周のコタンの人たちは、死んだ若者を部屋に寝かせ、娘と二人だけにしてやりました。

七日七晩泣きつづけた娘の声が消えたので、部屋をのぞいてみると娘は若者の胸で眠っていました。

それからまた七日七晩が過ぎ、コタンの長老が声をかけてみると、驚いたことに二人の身体は一つになっていたのです。

娘の悲しみを知った神様が心も身体もひとつにしてあげたのでした。

そして神様は娘が持ってきたヤマベを生き返らせてモアン川へ帰してやりました。

それから、モアン川の子は骨も柔らかく、この辺の川で一番おいしくなったということです。



切り絵 金子美和子

養老牛温泉の歴史

◎昔の養老牛

シュワン（標茶町虹別）のアイヌ榛孝太郎エカシ（族長）の話では、養老牛温泉はアイヌの人たちが400年以上前（1600年代）から利用していたとのこと。

1832（天保3）年ころ、松前藩士である今井八九郎が北海道の測量をした地図（東西蝦夷地大河之図）があり、その中に「ケ子カ（今の計根別のあたり）から3里半の場所にパウシベツ温泉がある」と書かれています。

幕末から明治にかけて5回ほど北海道や樺太を踏査した松浦武四郎は、紀行文の中で1856（安政3）年9月5日にワッカウイ（清里峠から緑に4キロ下ったあたり）からチライワタラ（標津川とポン俣落川の出会い付近）に向かう途中で昼食をとったカンチウシ川（養老牛のカンジウシ川）あたりでの見聞として「上にカンチウシ岳、その後ろに温泉有り。久摺（クスリ=釧路）のアイヌは総じて是に湯治する」と書いています。（東蝦夷日記）



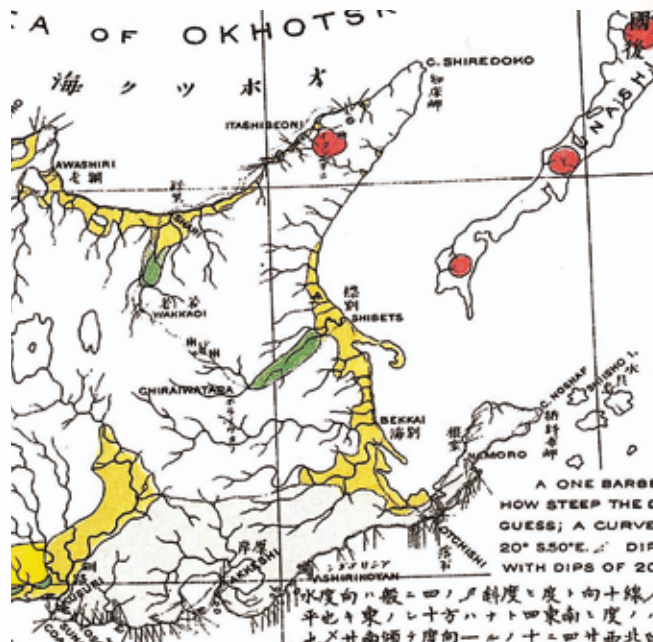
「東西蝦夷地大河之図」 東京国立博物館蔵

◎明治時代

1872（明治4）年に北海道が開拓使管轄下になり、根室出張所の松本十郎判官は7月に根室地方から北見地方へ巡回しています。ケネカを過ぎる途中に温泉への道があり、標津の人たちが入浴に行っていると記しています。

養老牛温泉の初めての学術的調査が行われたことが確認できるのは、1874（明治7）年のアメリカ人地質学者ヘント・ライマンの調査記録である「来曼北海道記事」です。ライマンは明治政府が北海道開拓のために設けた開拓使として北海道の地質や鉱床の調査をしました。

明治7年9月2日朝、チライワタラを出発しワッカオイに着くまでの間でパウシベツ温泉（現在の裏温泉）と標津温泉（現在の表温泉）でそれぞれ温度、



ライマンの日本蝦夷地要略之図 明治9年

成分、泉源数や状態について調べています。

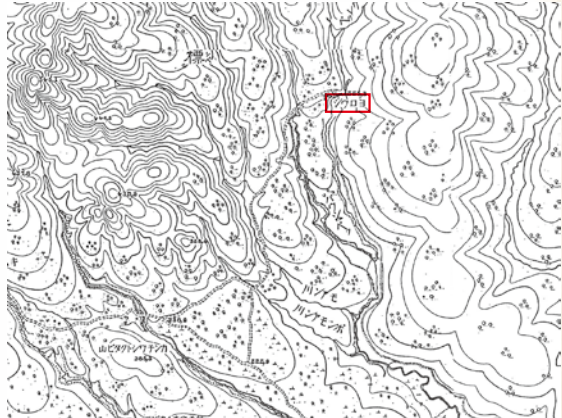
このライマンの記録で興味深いのは、「浴盤にするために掘った穴が多数ある。アイヌと和人が来て入浴している。浴場のそばに茅屋がある。温泉の近くにイナオ（木の棒を削った御幣）が多数ある。」更に「根室の日本人がここに滞留している。」などと、この地のことを細かく書いています。

その20年後の1894（明治27）年に開拓使の後身といえる北海道廳（現在の北海道庁ではなく内務省の出先機関）が泉質などの調査をしていて、その記録に「シベツ村アイヌが温泉のそばに小舎を営み浴客を待つ」「釧路国シュワン（標茶町虹別）、根室海岸など十数哩の地より来浴する者あり。」とあり、このころは虹別シュワンのアイヌだけではなく、周辺のいわゆる和人も来ていたことがわかります。

明治30年の道庁地理課発行の5万分の1「屈斜路湖」の地図にはパウシベツ川の奥に温泉マークがあり、標津川の奥には「ヨロウシ」の地名があります。



「明治31年 標津川上流ボッケ温泉之景」とある



明治30年の道庁地理課発行の5万分の1の地図

◎大正5年（1916年）～



榛孝太郎エカシ

和寒村からの移住視察で根室管内を調査していた西村武重はここから15キロほど南西にあるシュワン（標茶町虹別）に住んでいたアイヌの榛孝太郎エカシ（族長）から温泉がすぐそこにあると聞きました。西村は当時の地図を見て温泉があることは知っていましたが、すぐその温泉は別の温泉だと思っていました。

シュワンからまっすぐな踏み分け道が続いていて歩いているうちに日が暮れてしまいましたが、猟銃を持っていたことと若さも手伝って怖いものなしで夜空の山影と固くなっている地面を踏む足の感覚を頼りにいくつもの川を渡り今の裏温泉にたどり着きました。

見渡すと、小高い所には細木を何十本も並べた祭壇があり、地上1メートルほどの壇上にはクマの頭骨が50～60個も並び、若木を上手に削った新旧の木幣（イナウ）が何十本も立てかけてありました。これはクマ送りの祭壇であり初めて見た西村は、「実に荘厳で神秘的なものだった。」と記録しています。

思いがけなかったのは、そのとき裏温泉には人が2人もいたことです。一人は根室から羅臼にかけて海岸線の沿いの村で石臼の目立てをして生計を立てていた大川という老人で、胃を壊して湯治に来ていました。

もう一人はラウシというアイヌのチャチャ（威厳のあるアイヌの老人の呼称）で、若いころから根室、釧路、網走、北見を渡り歩き、これまで300頭以上のクマを仕留めたとのことで、このときも旅の途中だったようです。

翌日、大川老人に勧められひと山越した表温泉に行きました。その時に地形的にも湧出する温

泉の量からもよい温泉だと直感したようでした。

クマ送りの祭壇はここ（旧花山荘の玄関付近）にもあり、クマの頭骨が三百数十個、新旧散乱していました。榛孝太郎エカシの話では、そこは300年以上前から利用されていて、榛エカシの時代は主に裏温泉を利用していた。シュワンコタンの人たちは春の彼岸頃に20人くらいづつ交代で湯治に来て、男は猟銃を持ちクマを捕りヤマベを釣り、女はオヒョウ、イラクサを温泉につけてアッシ（アイヌの織物）を織っていました。

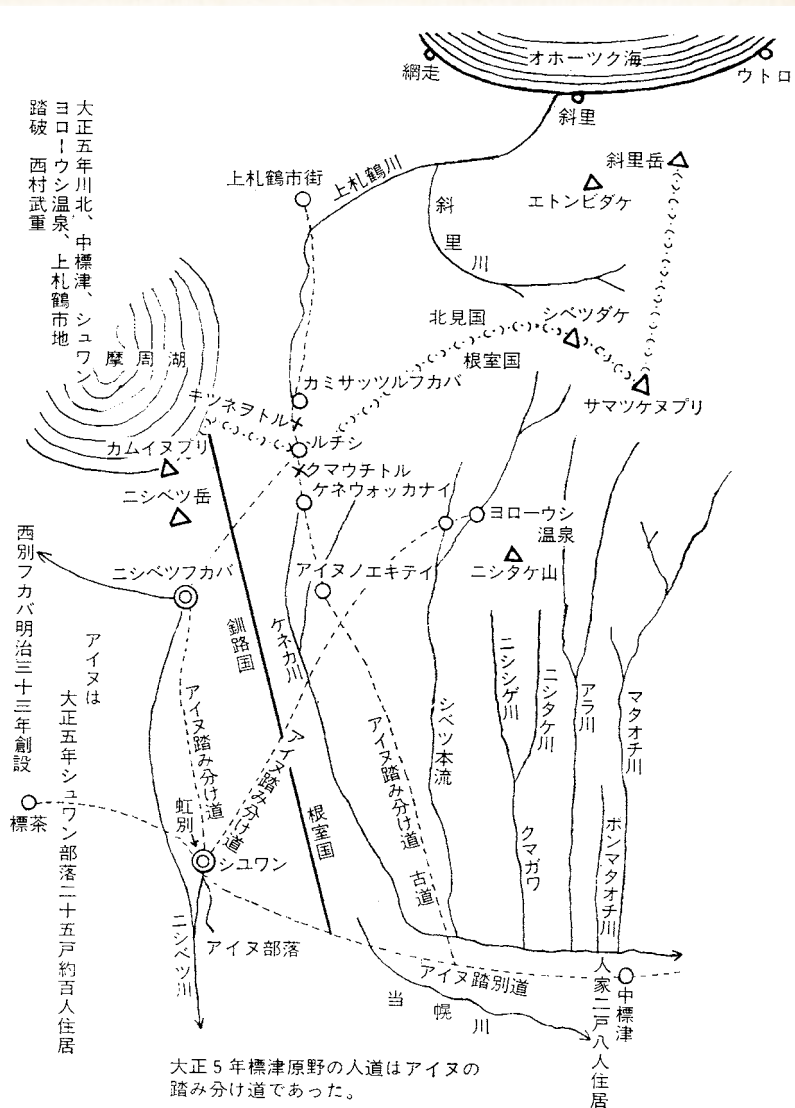
1917(大正6)年7月に再び温泉を訪れた西村は、湧出する湯を石油缶に入れ持ち帰り、温泉許可の申請をしましたが、容器が金属であることから分析に至らず数十日の旅程は徒労と終わりました。大正8年にはビール瓶12本に湯を入れ持ち帰りましたが、トウモロコシの芯で栓をしたため再び分析には至りませんでした。大正9年、ガラス容器にコルクで栓をして三度提出し、ついに分析成績書が発行されました。鉱泉使用願いを出し許可を得たのは翌大正10年のことでした。

西村はこの間に温泉旅館の建築にかかる一方で、俣落から温泉までの国有林地8千間（14.5キロ）、幅1間（1.8メートル）を根室営林署より有償で借受け馬車道を私費開通しました。しかし、この道路だけでは不十分と考え、大正9年ころから現在の46線道路開発のために釧路土木事務所あてに「温泉道路開発願」を毎年出しました。1927（昭和2）年に測量が行われましたが、実際に道路が完成したのは昭和7年のことでした。

◎大正から昭和

旅館を始めたころあまり利用者はいませんでしたが、入植が盛んになる1929（昭和4）年には根室町の坂本与平が養老牛温泉株式会社を作り標津村屈指の建物といわれる大一旅館を開業しました。昭和5年に小山卯作が小山旅館を開き、翌6年には裏温泉に堀口温泉旅館、さらに昭和8年に坂本与平が大一旅館を譲り別に坂本旅館を建築開業しました。

1937（昭和12）年の「北海道温泉案内」には「付近在住者の花見観楓及び閑散期における慰安湯治と冬期スキー客の程度なりしも、近年広く一般に知られ遠来の客も増加しつつある。」



とあり、旅館については「旅館は六戸あり、各戸共湯滝および大プールの設備あり。宿泊1泊1円20銭～2円50銭、自炊の便もある。」と書いてあります。当時は土産品としてワラビ漬やラジウム羊羹を売り出していたそうです。

しかし、第2次世界大戦が始まると客足が遠のき、1942（昭和17）年に西村、坂本、堀口の各旅館が相次いで廃業し火の消えたような状態になってしまいました。



昭和7年冬 手前が養老園、川向う左が小山旅館、右が大一旅館

◎昭和の華やかな時代～現代

戦争が終わり世の中が安定すると、1957（昭和32）年に釧路市の藤村敏一が花山荘を建築開業しました。当時の養老牛温泉の名を知らしめる有名な旅館で、赤い門柱があり女中衆が並んで出迎えをする格式のある旅館でした。西側の一段下がった場所には池があり大きな鯉がたくさん泳いでいました。

続いて1965（昭和40）年に藤林てるが藤屋旅館を開業しました。この年には養老牛青年の家も設置されています。昭和47年に裏温泉に山田林業保養所（グリーン養老牛）、昭和49年に町の老人保養施設「福寿園」が設置され、裏表あわせて7軒の宿がありました。

1978（昭和53）年に養老牛野外スポーツ林が設置されフィールドアスレチックがオープンしました。1984（昭和59）年に山田洋二監督の映画「男はつらいよ～夜霧にむせぶ寅次郎」の撮影が当地で行われ、山田監督や倍賞千恵子さんの定宿にもなっていました。

このころは阿寒バスが計根別市街から温泉まで運行され、売店、スナックなどもあり温泉祭り（のちの紅葉まつり）も開催されるなど最高潮の賑わいを迎えた時期でした。

しかし、時代の変遷とともに、1985（昭和60）年に青年の家、平成8年福寿園が廃止され、2003（平成15）年に花山荘が46年の歴史に幕を下ろし、2014（平成26）年には旅館藤やが廃業し、現在はホテル養老牛と湯宿だいいちの2軒宿となっています。



第12回養老牛温泉紅葉まつり（昭和53年）



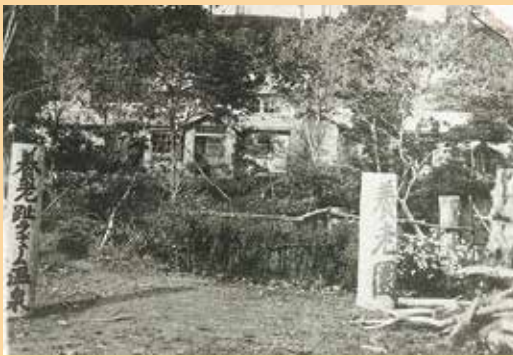
第14回養老牛温泉紅葉まつり（昭和56年）

養老牛温泉 ～旅館の歴史～



国土地理院昭和3年編纂同24年修正同35年資料修正20万分の1地勢図 斜里（部分）
西村が、俣落から温泉まで国有林内に開鑿した「温泉道路」が描かれている

養老園



大正9年 開業
「西村旅館」に改称
昭和17年 戦争激化のため廃業

坂本温泉旅館



昭和8年 開業
昭和17年 戦争激化のため廃業

老人いこいの家福寿園

昭和50年 設置（中標津町営）
平成8年 廃止



養老牛青年の家



昭和40年 設置（組合による運営）
昭和43年 ユースホステル併営
昭和54年 ユースホステル閉館
昭和60年 廃止

裏温泉



昭和6年 堀口温泉旅館開業
（裏温泉・昭和12年廃業）
昭和16年 板垣温泉旅館開業
（裏温泉・昭和23年廃業）

花山荘



昭和32年 開業
平成12年 廃業

旅館藤や



昭和40年 「藤屋旅館」として開業
昭和60年 「旅館藤や」に改称
平成27年 廃業



温泉まつり神事
(昭和40年代)



養老牛温泉の様子
(昭和40年代)

ようろうし温泉2軒宿 ～湯宿だいいち～



湯宿だいいちの歴史

昭和4年、現根室市の故・坂本与平により「大一旅館」を開業。昭和51年「ホテル大一」に改称。平成14年、現在の「湯宿だいいち」の名称になる。



創業当時の大一旅館の建物は、いわゆる洋館づくり。
壁もドイツ下見という、
ハイカラな建物だったようです。



昭和40年代後半

ようろうし温泉2軒宿 ～ホテル養老牛～



ホテル養老牛の歴史

昭和5年、「小山旅館」開業。昭和41年、「養老牛荘」に改称。昭和52年、「ホテル養老牛荘」に改称。平成4年、現在の「ホテル養老牛」の名称になる。



小山旅館の本館は、マンサード（五角形）屋根のモダンな建物だった。



昭和50年代

養老牛の自然 ～生き物たち～



シマフクロウ



エゾサンショウウオ



コンセンオオルリオサムシ



オシロコマ



カワガラス

写真提供：中標津町郷土館
(シマフクロウ) 佐々木正巳

養老牛の自然 ～植物・山菜～



ウド



ギョウジャニンニク



セリ



タラノキ



ハイマツ



ワラビ



ダケカンバ



ようろうし 養老牛温泉から 養老の滝までフツプ



8 新雪を歩く気持ちの良さは何とも言えません。「養老の滝」は林道から見る事ができます。

冬

滝へ向かう林道は冬山造材がなければ除雪されません。深く積もった雪が人を遮るのですが、天気の良い日は絶好のノーシュー日和です。純白の雪の上に踏み出した時の気持ちの良さはきっと思い出になります。



6 寒さ対策を忘れずに行ってください。ノーシューに慣れるまでは少しゆっくり歩いてください。



5 林道の入り口でノーシューを履きます。ストックがあると大変便利です。

● レンタルノーシュー

各宿に用意してあります。宿泊する方には無料で貸出いたします。



7 広葉樹は落葉し夏とは全く違う風景です。冬は見通しが良いのでエゴリスやヤマカケスに出会うこともあります。



4 全体では5メートルほどの滝で、夏の終わりごろには婚姻色に染まったサクラマスの滝越えジャンプを見ることができます。



3 1.5キロほど進むと「養老の滝」の看板があります。道路が二本に分かれます。

夏

温泉からモシベツ林道を歩いていくと、深い森の緑に抱かれ養老の滝が流れ落ちています。降りしきる日差しを木の葉がさえぎりひんやりとした川辺で、蝉の声と水の音が重なり合い、じっと聞いていると体が自然の中に溶け込んでしまいそうです。



2 標津川沿いに道は進みます。砂利道はアスファルトの上の歩行とはずいぶん感触が違います。



1 標津岳入口の看板があり、ここからモシベツ林道の始まりです。



イラスト / アーバンイラスト制作室



2 森を抜けると草場が開け乳牛が放牧されるモアン牧場です。周囲に明かりがないので夜は満天の星空となります。

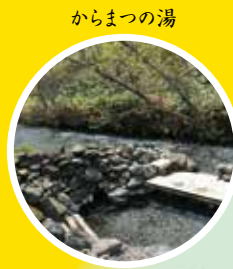
サイクリング・ジョギングマップ

養老牛温泉周辺を自転車で走ってみた

温泉を出発し、旧養老牛小学校を一周する約10キロのコースです。森林地帯を抜けると牧場が広がります。「牛」の字が判り込んであるモアン山を眺めながら酪農地帯を進みます。乳牛が草を食むゆったりとした景色や格子状の防風林は道東を代表する景色です。



3 地元JAの青年部が判り込んだ「牛」の字があるモアン山が右手にあります。ふもとを流れているのはモアン川です。アイヌの悲恋伝説があります。



からまつの湯



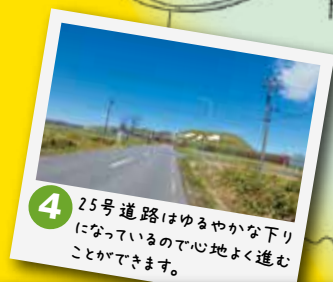
1 温泉を北側に進むとすぐ森の中に入り少し傾斜が続きます。下り坂になるとパンベツ川があり、ほとりには「からまつの湯」があります。



9 到着へ。お疲れ様でした。ゆっくり汗を流してください。



8 温泉への入り口です。緩いのぼりが続き、酪農地帯から国有林に入るとゴールは間近です。



4 25号道路はゆるやかな下りになっているので心地よく進むことができます。



5 左上の矢印は路肩を示すものです。回りが平らなので除雪の際にこれがないと道路の位置がわからなくなっちゃう。

● レンタサイクル
各宿に用意してあります。宿泊するには無料で貸出しいたします。



6 道内でも屈指の酪農地帯です。道路沿い牧場で牛の歓迎を受けます。交差点は中間地点で自動販売機とトイレがありますので休憩ポイントとなります。



7 標津岳を源流とする標津川は日本一のサケの遡上河川です。さけます孵化場があり、春先に放流され4年後に戻ってきます。



ようろうし 養老牛 牛じゃありません 温泉です

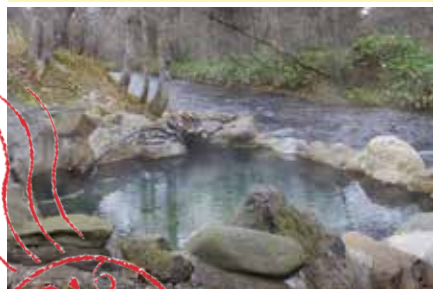
牧場を抜けると
す
シマフクロウの棲む森があります
ようろうし
養老牛温泉は森の中

2016年、ようろうし 養老牛温泉は開湯100周年を迎えます

森の中の2軒宿。

なかしべつ ようろうし
北海道中標津にある秘湯、養老牛温泉。
アイヌ語を由来とする地名で、400年ほど
前からアイヌの人々に利用されていました。
2016年に開湯100周年を迎えます。
森の中の3軒宿は、標津川沿いにあり、
露天風呂からの四季折々の風景が心を癒し、
俗化されていない温泉として多くのファン
の心をつかんでいます。

泉質：石膏食塩泉
泉温：85度
効能：神経痛、腰痛、婦人病、リウマチ、打撲



道東ど真ん中！

摩周湖、屈斜路湖、野付半島、
そして知床まで、道東を満喫
できます。



ようろうし・森の楽しい仲間たち

心優しい乳牛。
ドジでのおんぼり屋。
森のアイドル的存在。
ちょっとナルシスト。
実はすごい小心者。

森に棲むシマフクロウ。
頭はイイが怒りっぽい。
頼られるとイヤと言えない
お人好みな面も。

エゾクロテンの女の子。
ちょっと小悪魔的。
ジビエメンが好き。
夢はかわいいお嫁さん。

標津川に棲むヤマメ(ヤマバ)。
基本、何も考えていない。
食べることに寝ることに
キョーミがない。

ようろうし 養老牛温泉旅館組合

ホテル 養老牛 (0153)78-2224
わらび、ふき、こごみ、行者にんにく...
宿の主人みずから採取した山菜料理
が自慢です。

湯宿 だいいち (0153)78-2131
客室はすべてしつらえが違います。
朝食は50種類のバイキングで
地の味をお楽しみください。

(一社) なかしべつ観光協会
(0153)73-3111(代)

